



てあぶ
陶製手焙り (うち左2点は持手付き手焙り、ただし右は持手が欠損)

箱火鉢 (一对、木製)

てあぶ
手焙り (一对、金属製)

いすようてあぶ
椅子用手焙り火鉢 (木製、陶製)

こたつ
炬燵兼用手火鉢 (上3点、陶製)

あしあぶ
足焙り (ジュラルミン製)

あしあぶ
足焙り (木製)

寄贈資料の中から ^{てあぶ}手焙りと^{あしあぶ}足焙り

今回は、資料の中から手焙りと足焙りを紹介します。これは個人で使用する小型の火鉢で、手をかざしたり、足を載せたりして体を温めます。中に断熱材として灰を入れ、その上に火を起こした木炭を置いて使います。

木炭は、炎を発しにくく煙も出ないため室内での使用に都合がよく、暖房用としての需要は中世以降急速に広まり、近世には庶民にまで普及しました。そして木炭の需要が減少する昭和30年以降までの間に、さまざまな火鉢が作りだされました。

写真左上の2点は、漁を行うために魚の群れが湾内に向かってくるのをうかがう見張り小屋にあったもので、大正期から昭和初期まで使用されました。一つは破損していますが、どちらも持手付きです。手焙りの中では最も小さく、直径は14~15cm程で、右の資料は球形につくられた側面に、口と通気孔^{つうきこう}がいています。陶製のほかのものは日用に使われたもので、趣向を凝らしたものが多く見受けられます。

箱火鉢や円筒形の手焙りのうち一对であるものは、

座敷で使われる接客用の火鉢で、来客時に客と主人が使用するために部屋に備えておくものです。

炬燵兼用手火鉢は、小型の火鉢に通気孔と蓋をつけることで、手焙りだけでなく炬燵としても使えるように考案されました。昭和初期に三徳火鉢という名称で製品化されたのち、類似品が多く生産されました。

椅子用手焙り火鉢は、商店で客が暖を採るために店内に置かれたもので、椅子に座って使えるように高さがつけられています。左のものは昭和35年頃まで呉服屋で、右は戦前に制服問屋で使用されていました。

足焙りは、椅子に座っている際に足先を温めるものです。ジュラルミン製のものには蓋の上に両足を載せて使います。昭和20年代に高校生だった人の話では、小さく火のついた炭を1本だけ灰に埋めて勉強机の下などに置き、足袋や靴下を履いた足を載せたそうです。木製のものには内部に火入れがあり、棧の上に足を置きます。使い方は千差万別であり、足焙りを手焙りとした例や、炬燵兼用手火鉢で足を温めた例もあります。

駿河湾の漁

金指 貢さんの漁話

カンジョウブルマイとボタモチ 大漁の祝いと願い

漁師は漁を求めて様々な祈願を行います。願いが通じ、ひとたび大漁となれば、漁を与えてくれた神仏に感謝を示します。そして、大漁に関わった漁師を集めて祝いの宴を開きます。長宝組では大漁があった時の祝いの宴のことをカンジョウブルマイ(勘定振る舞い)と呼んでいました。カンジョウとは漁に関わった経費や漁師の給金などを計算し支払うことを指します。その月に大漁が何度かあり、相当の売上が上がった場合には、カンジョウの日、つまり、漁師に給金が支払われる日にカンジョウブルマイという祝いの宴が開かれます。サバやアジではそこまでの売上が上がることが難しく、マグロの大漁が続かなければカンジョウブルマイは開かれませんでした。マグロがたくさん回遊してきた昭和20年代でも年に2、3度ぐらいでした。

カンジョウブルマイは長宝組の複数いる網元で月ごとに交代していくトウバン(当番)の家で行われます。夕方から行われますが、宴会の準備を行う女性たちは朝からその準備に追われます。日々の漁が終わった後に酒食をともにしながら漁の反省を行うオキアガリでは、希望者だけの参加となるのでトウバンの家の女性だけで準備を行います。しかし、カンジョウブルマイでは長宝組の網元や乗組員のすべてが参加します。昔は50人ぐらいの組員がいたので、トウバンの家の女性だけでは準備が間に合わず、他の網元や乗組員の女性たちも30人ぐらいが手伝いとしてやってきました。そして、その翌日にも女性たちが呼ばれ、祝宴の片付けの手伝いを行いました。

カンジョウブルマイではトウバンの家の棚に祀られている恵比寿と大黒天に供物を供えます。恵比寿は、資料館だより217号「オイベッサンを祀る 恵比寿講」でも触れているように、大漁をもたらしてくれる漁師と関係の深い神様です。トウバンの家の居間に置かれたいくつもの大机の上にはひとりひとりの料理が並べられていきました。若い漁師たちは長岡(伊豆の国市)まで祝いの宴を盛り上げるための芸者を呼びに行きました。カンジョウブルマイは夕方から始まり、夜の10時ごろでお開きとなります。終わるころには給金をもらい、各自、家路につきます。

カンジョウブルマイでは、通常の祝いの宴では出されない料理が出されます。それが、小豆のボタモチです。ボタモチと言っても、和菓子屋で販売されているような大きさのボタモチではなく、その2倍以上の大きさのある巨大なボタモチです。このボタモチが5個ずつ皿に盛られ、一人前の料理の一品として並びます。

大の大人でも全てを平らげることは難しく、1、2個だけ手をつけて、残りは帰宅する時に持ち帰ります。このボタモチはカンジョウブルマイで出される他、付き合いのある商人や漁協や船大工や内浦小海にある寺院に配られたり、長岡から来た芸者にも帰る時には持たされました。

ボタモチ作りは女性たちの仕事です。カンジョウブルマイで作られるボタモチの数は300個以上にもなります。釜でもち米を炊き、炊き上がったら釜の中のもち米をすりこぎでつぶしていきます。餡子はつぶし餡で、小豆を煮てから練って作ります。巨大なボタモチを作らなければならないので、手のひらに餡子をのせ、その上にもち米をのせてくるむように作ることができません。そのため、丸めたもち米に餡子を手にとって塗るようにして作っていきます。

このカンジョウブルマイに出されるボタモチには、この大漁が長く網組に居座って欲しいという願いが込められています。居座って欲しいという願いが込められたボタモチは、カンジョウブルマイの他に祝言の翌日に祝言を手伝ってくれた女性を集めて行われるオンナシュウブルマイ(女衆振る舞い)でも出されます。ここで出されるボタモチには、嫁いだお嫁さんが家に馴染み、長く居座って欲しいという願いが込められています。ただ、オンナシュウブルマイのボタモチは通常の高さで、お嫁さんを甘やかさないという意味も込められているため、塩を使った塩餡で作ります。塩餡のボタモチはそのままでもおいしいですが、砂糖をつけながら食べるとなおいっそうおいしくなります。

現在ではカンジョウブルマイをトウバンの家で行われることはなくなり、料理屋やホテルなどへ行って祝いの宴が行われるようになりました。そのため、巨大なボタモチを目にする機会もなくなりました。昔、カンジョウブルマイに来てくれた芸者から「昔は懐かしいね、あのボタモチ。」と言われたこともありました。(話：金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住)



写真1:通常のボタモチ(左)とカンジョウブルマイのボタモチ(右)※再現

◆ぬまづ点描「2つの首塚」②

2つ目の首塚（西間門）

加藤 雅功

『静岡県名勝誌』（明治36年刊）に掲載の「髑髏塚」の原典は『沼津雑誌』（明治16年刊）であり、「髑髏塚」として紹介され、「間門の北端に在り、金山神祠の前の塚上に古くは、両手で抱えるほど太い一本の古松が有った。去る年の秋に強風が吹き、塚を壊し松が倒れた。土の中からうず高く積もった、百余の頭蓋骨が露出した。地元民は未だ何の遺跡であるか知らないという。しかも畏れつつしみ、そしてこれを元のように復原した。自然にこの塚の呼称は「髑髏塚」と名付いた。」（原文は漢文）と記されている。明らかに発見の経緯からも千本松原の東側の首塚とは異なるものであり、明治14年（1881）9月14日の暴風雨かで倒木したことが推定される。

江戸前期の『東海道分間延絵図』では、西間門村には「金山」と記した神社と社叢が描かれており、また大正期の『駿東郡片浜村全図』でも旧東海道の北、字北側の中央部に神社として描かれている。東間門に接した沼津本町の古社の丸子神社と関係して、金山彦命を祭神とした金山神社は西間門の旧村社であった。

明治前期の金山神祠は、現在八幡神社に合祀されている金山神社のことで、大正3年頃に編纂された『片浜村誌稿』では「西間門にあり、松樹一本残すのみ。昔武田勝頼が丸子神社を攻め、守兵を捕らえてこの所において打ち首とした。壙穴を穿って葬ったという。先年髑髏（頭蓋骨）を20有余掘り出したという。」との内容が記されている。明治の末期で、既に神社が合祀されてしまって確認できないが、明治前期に塚を復原しており、弔った後の髑髏は追善供養の対象となった。ただし、金剛寺には埋葬されていない。

神社の跡地には古い松がたった一本残っただけであるが、首を埋める墓の穴を掘って葬った時期は、未だ街道整備がされていない頃で、千本松原の広がりがこの付近にまであったのであろう。後北条の時代に武田

勝頼の信仰・祈願が厚く、かつて小田原攻めの際の戦勝祈念を丸子神社で行ったという。しかし、勝頼は戦に破れて敗走し、丸子神社の社殿ほかを焼き払い、守っていた敵の兵を殺戮し、その際に、捕虜を金山神社の地で斬首の刑に処したという。金山神社が八幡神社に合祀されて移った後、空闲地の西側は新たに公園となり、今では西間門公会堂が建って地域コミュニティの中心となっている。東側は金剛寺の所有する土地で、空間的にも塚や松が有ったスペースの可能性はある。松や塚も残っていないが、通り寄りの東側に庚申堂が東海道分間延絵図にあり、西側の松が塚であろうか。既に該当する付近は住宅地となり、確認する術もない。

東間門には「六代松」の旧跡が松原の内にある。平六代を弔う首塚（供養墓）ではあるが、地元では「首塚」とは呼ばない。かつて「六代御前」の石塔（供養塔）と「六代松」の大樹があり、やがて松が枯れてしまったので、その跡に天保年間に石碑が建立されている。史実は別として守り伝えてきた六代（妙覚）伝承の地である。ただし、「六代松碑」付近には首塚の伝承もなく、また、塚の位置も集落の南側である。

余滴ながら、祭神の金山彦命に絡めて、武田の「金山衆」は戦国期から粗金の採掘に従事し、その鉱石採掘技術を生かして城攻めや用水工事に力を注いだ。武田氏と丸子神社の関係や接点が、そこに見えてくる。

また、武田氏に限らず、千本浜の戦いでは北条氏も同様に蛮行を振るい、結果的に首塚の土盛りとして埋葬された。首塚には今回の多数合葬（群集）塚のほか、姓名の判明する個人塚などもある。さらに群集塚の事例でも、分類的には千本浜（千本郷林）の首塚と同様に「地元民の協力による祭祀や築塚」に該当する。

なお、蛇足ながら、むしろ奇遇と言うべきか、筆者の祖父の菩提寺である三島の林光寺は、武田勝頼の弟の家臣が残党として落ち延びて開いた寺であり、その七人衆の一人を先祖に持つのが私である。



片浜村全図（部分・明治史料館蔵、沼津市史別編・絵図集から転載、中央下が金山神社、左下が八幡神社）



東海道分間延絵図（部分・東京堂出版刊から転載）

魚見のある風景⑩ 静浦多比

通巻201号で紹介した絵葉書写真「沼津名勝・静浦多比濱」の多比松ヶ崎の先端に建てられた魚見櫓を同じ多比の船越側から見た写真です。同じ方向から見た絵葉書が『静岡県の絵はがき』（羽衣出版H5）にも載せられています。そちらの絵はがきでは道の右側に礫浜が広がっていますが、こちらの絵はがきでは、浜ではなく石垣が積まれており、その上に網が干されています。岩山の左側は切通しとなっており、手前には網小屋らしい建物とイキョと呼ばれる竹で編んだ鯛の生簀が並んでいます。

「静浦の民俗」によれば、松ヶ崎の手前は「フナゴシノホラ」（船越の洞）とよばれるアンド（網度＝漁場）で、裏側は「エーノマエ」（家の前）とよばれるアンドでした。このアンドに近づく魚群を見張るのがヨミド（魚見所）で、遠くを見張るオオヨミドと近くを見るヨコミドの2つがあり、二箇所のアンドの兼用と

なっており、両方とも松ヶ崎の岬に設けられていました。オオヨミドには小屋があり、先端のヨコミドは木を組んだ櫓でした。写真に写っているのがヨコミドに相当するものと見られます。フナゴシノホラでは鮪はとれず、鯛地引の漁場だったようです。



静浦八景多比濱の魚見台

資料館からのお知らせ

企画展「沼津のひもの・かつおぶし」 の開催

2月5日から本年度企画展「沼津のひもの・かつおぶし～国指定漁具コレクション水産加工用具～」を開催します。

現在、全国的にも大きなシェアを占めているアジの干物や、わずかながら今も作られているかつおぶしなど、近くの海でとれ、水揚げされた魚類を加工して、より長持させたり、おいしく食べられるように加工する方法が伝えられたり、改良されたりして地場産業として発展してきました。

地域に残された国指定漁具コレクションの中の水産加工用具を通して、こうした技術や歴史を紹介します。



山甚板東海道五十三次三十沼津

昔の生活用具の使用体験

社会科見学の一環として、来館された児童の皆さんに昔の生活用具を体験してもらうことを組み込んでいます。見るだけでなく、実際に試してみることで、昔の生活の大変さやそれを克服してきた昔の人々の工夫や知恵に触れていただきたいと思います。



あかり体験の様子

沼津市歴史民俗資料館だより

2018.12.25 発行 Vol.43 No.3 (通巻220号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp